

第59回日本糖尿病学会関東甲信越地方会開催報告

2022年1月22日の土曜に第59回日本糖尿病学会関東甲信越地方会を完全ウェブ方式にて開催させていただきましたので、その概要について報告させていただきます。本会は新型コロナウイルスCOVID-19の流行のため、前年度と同様に完全ウェブ方式で行なわれました。開催直前まで、シンポジウムやセミナーに関しては現地での発表を含むハイブリッド開催を模索しましたが、新年になってもCOVID-19の勢いは衰えを知らず、最終的にウェブ方式のライブ配信のみで行うことに決定いたしました。開催方式の決定に関しましては、日本糖尿病学会関東甲信越地方会支部役員の皆様の多くの貴重なご意見とご支援を賜り、またウェブ配信に関しては日本コンベンションサービスのスタッフの皆様の多大なご協力をいただいたことに心より感謝申し上げます。

今回の学会は、会長の私が小児科医のこともあり、「小児から成人へー糖尿病医療の連携」をメインテーマとして掲げました。そのテーマに添い、最初のシンポジウムは「糖尿病の小児科から内科への移行期医療を考える」をトピックといたしました。内科医、小児科医から多くの移行期医療に携わった先生方に講演していただき、移行期医療の現況とその問題点について活発な議論が行われました。またその他のシンポジウムは、「ダイバーシティ」、「グルカゴンの基礎と臨床」、「糖尿病の災害医療」に関するものであり、何れも現在の糖尿病診療、研究には欠かせない話題で、興味深い発表と意味ある議論が展開されました。また一般演題は208演題の発表（210演題の応募、2演題が取り下げ）と例年以上の発表数でありましたが、その中でも今まで非常に少数であった小児・思春期糖尿病に関するものが10演題（2セッション）あり、今後は小児科医も積極的に本学会に参加し、発表および議論に加わる姿勢が伺われたものと期待しております。またメディカルスタッフと妊娠関連についても各々10演題発表があったので、本学会への多種分野からの多くの医療従事者の参加が期待され、この意味で本学会が益々クオリティの高い活発なものになると思われます。

このような状況の下に、今回の学会には、医師・一般1,459名（前年1,649名）、メディカルスタッフ979名（前年940名）、無料参加者・招待者145名（前年137名、今年度内訳：初期研修医・学生86名・招待者を含む関係者59名）の合計2,583名（前年2,726名）と例年の学会と遜色のない、大勢の方に参加していただき、活発な意見交換が行われ、充実した学会を行うことができました。これは参加していただいた皆様のご協力と熱意によるものであり改めて厚く御礼申し上げます。

2022年12月8日

日本大学病院小児科 浦上達彦